

身の毛もよだつ実態 「洗濯したタオルの中からも」

この7月、三重大学病院で、医師二人がB型肝炎にかかり急死する事故がおきた。これを契機に、医療機関において医師、看護婦などのB型肝炎感染事故がいくつかあったことが明らかになり、大きな社会問題となってきた。しかし、医療機関で働く清掃労働者、さらに廃棄物を処理する労働者については、どのような危険な状態におかれているのか、そのことを通して、病院の安全や国民全体の安全にとってどのような問題が生じているのか、という点についてはまったく知られていない。厚生省はようやく来年度予算要求に「医療系廃棄物処理技術調査費」(1000万円)を組んだが、どこまで行き届いた調査になるのか定かではない。

こうしたなかで、事業団全国連合会は、機関紙『じぎょうだん』に「捨てるゴミの向こう」と題した連続追及記事をのせ、10月15日号では「注射針による事故を防ぐためのアンケート」を掲載、11月8日までに、常駐団員のいる42の病院・診療所のうち40の事業所、223人からの回答を得た。アンケートでは、半数の団員が「この一年間に針を刺した」と答えているなど、大変な実態があきらかになった。そして個々の例をさらに突っ込んで聞いてみると、身の毛のよだつような事態が

生じていた。

「タオルや手術用のガーゼなどを洗濯しているが、脱水機からとりだしたタオルに注射針が刺さっていた。もし針が折れていたら見つけれなかっただろう。そのタオルで患者さんをふいたとしたら…」(東京の病院で最近あった例)。

「廃棄物処理業者がトラックで捨てに行く途中、注射針を入れたゴミが路上に落ち、散乱。子供たちがそれで遊んでいた。病院名のシールを貼った針があったのですぐ連絡がきて回収したが…」(九州の病院で数年前にあった例)。

「しょっちゅう針を刺していたが、蚊にさされた程度にしか感じていなかった清掃労働者がB型肝炎に感染して入院。大事には至らなかったが、それが原因でビルメン会社を解雇された」(関西のある病院で。事業団が入る前のビルメン会社のときのこと)。

これらは、もちろん氷山の一角であろう。しかも「注射針」に限った事例である。「注射針以外のことで危険に感じたこと」として回答されたさまざまなケースも実に重大だ。これらについても実態を調査し、抜本的な改善運動にとりくまねばならない。注射針問題は、その突破口を切り開くものになると、私は思う。

労働省・厚生省の対応 「清掃労働者」いつも枠の外

ところで、なぜこのような状態が全国的にまんえんし、放置されてきたのか。

この点で指摘しなければならないのは、第一に、政府・自民党の反動的で貧困な労働政策、医療政策などに原因があるということである。ここでは、それを全面的に問題にすることはできないが、行政の対策が狭い意味での「医療従事者」に限られ、清掃労働者のことは何ら考えられていない、ということを経済的な問題として取り上げたい。

たとえば労働省。労働省は、B型肝炎の感染事故が社会問題になってから、「医療従事者」の労災認定を再調査した。その結果、1985年10月から今年7月までの1年10か月の間に、伝染性疾患で死亡または休業4日以上と認定された98人のうち、73人がB型肝炎で、8人が死亡、という事実が明らかにされた。

新聞報道（10月11日付）では、「同省は予想を上回る医療現場での被害にショックを受けており、対応策を検討している」というが、労働省に電話で聞いてみたら、「医療従事者」とは、「直接医療にかかわる者」であり、清掃労働者などはまったく含んでいないし、今後もそうした労働者の調査をする予定はない、という。調査をしようとしても、先の例で見たように、労災認定もされず、解雇され、「闇から闇へ」というケースが多いのではないかと私は思う。

厚生省も同様で、私が会った担当者の中には「病院の清掃にそんなに下請けが入っているのですか」と、びっくりする人がいたほどだ。

こういう認識だから、病院清掃の仕事

の危険性については、まったくといってよいほど顧みられてこなかった。

労働省安全衛生部労働衛生課主任中央じん肺検査医の河野慶三氏も、「血液に接触する可能性の高い人々のほとんどは、専門性の高い職種に属しているのだから、自己管理を積極的に行うべきである」（『労働衛生』1987. No.10）と述べ、「危険性の高い人」として、医師、看護婦などしか念頭においていない。

しかし、病院清掃という仕事は、その実態をよく見てみれば、危険性が「最も高い」業務だとさえ言えるのではないか。

厚生省が最近出した『改定 B型肝炎医療機関内感染対策ガイドライン』では、感染予防上、「最も重要なことは、感染源の認知、すなわちその患者がHBs抗原陽性であることを知ることと、その感染経路の遮断とである」としている。しかし、清掃労働者は、その「最も重要なこと」である「感染源の認知」ができない。病院から患者についての情報が提供されていないし、もし、提供されていたとしても、医師や看護婦のように、どの患者に使用した針を刺したのかはわからない。せいぜい、どの病棟から出た針かがわかるていどなのだ。だから治療も適切なものとはなりにくい。

『改定 ガイドライン』ではまた、旧版にあった「患者からの廃棄物の処理」という項目がなくなり、「入院中のHBs抗原陽性患者からの廃棄物は、ビニール袋に入れ、焼却処分とする」などの文面が削除されている。厚生省に聞くと、「ガイドラインは、財団法人・ウィルス肝炎研究財団がつくったものなので、な

ぜ削ったのかわからない」とか「廃棄物処理については他の課で指導を強めているからではないか」とか、まったく無責任な見解であった。

「危険性」の問題について、ついでに言っておきたいことがある。予防接種にふみきった病院の中でも、「危険性の高い」業務を理由に、医師、看護婦から接種をし、他はあとまわし、ということがよく見受けられる。下請けなどはもちろ

ん対象外である。

しかし、「危険性」が「低い」業務の労働者が針を刺してとりかえしのつかないことになったらどうするのか。生命の問題については、「危険性がある」こと自体が問題なのであって、それが「高い」か「低い」という勝手な理屈で対策を遅らせたり、雇用関係のあるなしのみで放置したりすることはあってはならないことである。

安易な下請化と 多忙な看護婦、その中で…

第二に指摘したいのは、こうした政府・自民党の政策、行政指導のもとで、病院経営も厳しさが増し、その中で、清掃にしても給食にしても、一つひとつの業務の持っている意味、重要性について充分検討されないまま、経費節減のための安易な下請け化が急速にすすめられてきたこと、そして管理責任があいまいにされてきた、ということだ。

たとえば、モップ拭き一つとっても、モップ置き場はどうなっているのか。たいてい、階段下の通風の悪いところにある。滅菌灯や乾燥機のついた道具置き場は、まず見られない。じめじめしたモップの中で細菌が増殖し、「モップという細菌の培地で下をふいて歩いて、そこらに細菌をまき散らしている。ここが院内感染の一番の弱点ではないか」（『臨床医』1985. No. 3）という熊本悦明札幌医科大学教授の指摘があるが、このこと一つ考えても、清掃という仕事の重要な意味について病院としてどれだけとらえ

ているのか、疑問に思わざるをえない。

それは、委託単価の低さや、清掃労働者の控え室が地下の換気の悪いところにあり、「手洗い場もなく、茶わんもモップを洗うのと同じ所で洗っている」（東京のある病院）という現実にもなっているのではないかと。

第三に指摘したいのは、医師、看護婦の、聞きしにまさる多忙さである。そして下請労働者や清掃労働者との交流があまりなく、労働者どうしが分断されている状況とがあいまって、「捨てるゴミの向こう」を考えない働き方となっているのではないか、ということである。

「私は、この間まで病院の看護婦をしていましたが、忙しさを理由に、ゴミの捨て方に注意を払ったり、あとの処理を考えることなどなしに仕事をしていました。事業団の方が針で指を刺したという話を聞いたことがありましたが、病院のスタッフを含めて、ゴミの捨て方を再検討するところまではいきませんでした。

同じ病院で働く仲間として、事業団を見ていなかったようです」(『じぎょうだ

ん』9月15日号)と、看護婦・中村三和子さんが率直に語っている通りであろう。

「捨てる側」と「捨てられる側」 そのふれあいの中から

こうした中で、予防対策、安全な仕事を求める運動も大きく前進してきた。

都職労は都に要求して都立病院の医療従事者を対象としたB型肝炎予防ワクチン用の1億3000万円の予算措置を決めさせ、都清掃職員にも地方公務員災害補償基金で適用拡大をはかることにさせた。そして、民間の医療労働者、下請け労働者にも適用拡大をと、機関紙『都職労』でキャンペーンをはっている。

日本医労連も厚生大臣あてに「緊急かつ徹底した防止策」を訴え、「医療従事者(正職員、パート、下請・派遣労働者を含む)に対し、公費または使用者負担によって、HB関連検査、及び、HB1Gワクチンを投与すること」「発病予防として、すべての医療機関がガンマグロブリンを常備するよう、指導を徹底すること」などを要請した。

民医連も公的責任でのワクチン投与などを求め、各地で運動を強めている。

しかしながら、私の知る限り、労働組合として自らの労働のあり方を見直し、針の捨て方について改革をはかったというような例は、残念ながら聞いていない。医労連は最近、この点にもふれた「マニュアル」を出したが、関係労組に取り組みの強化をお願いしたいところだ。

事業団も、自らの仕事のあり方の検討・改革や、「捨てる側」への提案、問題

針を見つけるたびに、改善の申し入れをおこなった。今ではほとんど針に悩まされないという。



清掃団員にむけての院内感染の学習会にかけつけてくれたみさと健和病院松本副総局長

提起も含めて、労働の現場で一步一步「安全な仕事」「安全な病院」をめざして努力していかなければならないが、すでにその立場で、豊かな実践が取り組まれている。

針を拾うたびに、どこに落ちていたかを明らかにして持っていく、そして、「このポリタンクに入れてほしい」とか、

具体的な容器まで用意してほしいする。そうした提案には、病院も積極的に応えてくれた。そして「捨てるゴミの向こうに人がいる。針はすべて別の容器に」という貼り紙を婦長室名で出してくれたり、忙しい中、院内感染予防学習会の講義を引き受けてくれる婦長もでてきた。感染のおそれのある入院患者についての情報を提供してくれる病院もでてきた。これは事業団が同じ病院の仕事をする仲間として見られてきたことの証明だろう。

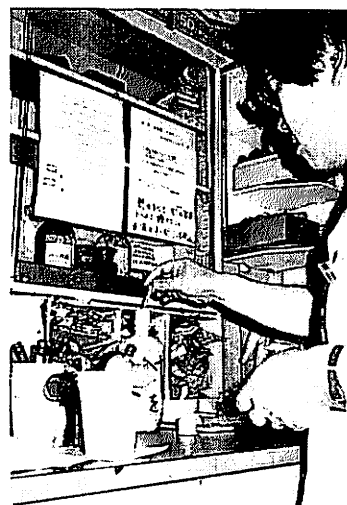
事業団員は、病院職員との関係はもちろん、患者との関係でも、具体的にどうしたら改善が進むか、という立場で接している。

私はいくつかの病院取材したが、団員は患者に対し、とても親切だ。病室のゴミを集めてまわる団員は、「おばあちゃん、どうだい」となごやかに挨拶をしながら行く。「事業団は、患者さんと話ができる。それが一番うれしい」と話す団員もいる。

患者や見舞い客は「捨てる側」の一員でもあり、湯飲み茶碗を割ったときなど、そのまま一般のゴミの中に捨てたりする。とくに危険なのがカミソリである。

この点、みさと健和病院（埼玉）の事業所では、患者に文句を言うより、どのような条件を整えたら、捨てる人もちゃんと分別してくれるかを考え、洗面所にほうっておかれたままのカミソリをビン

「捨てるゴミのむこうに人がいる」と、婦長室名で針の処理徹底をよびかける貼り紙



に入れておいた。すると、次の日から、ちゃんとそのビンの中にカミソリが捨てられていた、という経験を持っている。「私たちがきちんとすれば、もっと協力してもらえる」というのが団員の発言だった。

私は、この例について『じぎょうだん』（9月1日号）に「患者さんを信頼して改善策をだしあう」という見出しをつけて報じたが、ここには明らかに、「民主的改革」の立場で、「良い仕事」をしようとする仲間の姿があり、新しい豊かな人間関係の芽生えがあった。

岡山・水島で始まった「事業団ヘルパー」取材したときにも感じたのだが、事業団員のこうした意欲ある仕事ぶりや、改革の提案などが、医療や看護のあり方にも小さくない影響を与えていくように思える。

「提携」関係が産む「よい仕事」 「全国観点」で変革の力に

ところで、『じぎょうだん』新聞連載

のタイトル「捨てるゴミの向こう」は7



針をさしたまま袋に捨てられる点滴ビン。
「そのまたむこう」を考えて責任ある処理
を提案してゆきたい。

月1日号にのせた投書「捨てるゴミのむこうにも人がある」からとったものである。

ある病院の医者の部屋で、「燃えるゴミ」のカンの中に手をつこんで、かきだそうとした時、混ざっていた瀬戸物の破片でケガをした、という話を聞き、すぐ投書してもらったものだが、「捨てるゴミの向こう」を考えて仕事を、という提起は、“次工程は仲間だ”という、あらゆる労働につながる大切な原理だと思って、一面に大きくのせたのだった。

そして、次の7月15日号では「そのまた向こうに人がある」との見出しで、栃木珪肺労災病院の取材記事をのせたのだが、これがまた重要な提起をしていた。ここでは、廃棄物の最終処理に近いところまで請けおっている。事業団が仕事を始めた時、針を町の焼却場に持っていきこうとしたら、「危険だから」と拒否されてしまった。そのため、針を一斗カンに入れ、病院の焼却炉で殺菌した上で密閉し、町の焼却場にもっていく、というやりかたをとっている。

田中義博事業所長(24歳)は「私が前にいた病院では、業者がゴミを持っていてくれたから、そのあとどうなるか、なんて考えなかったが、そこでズサンな廃棄物処理がされていたとしたら、結局、“そのまた向こう”の住民に危険がおよんでくる」と言っていた。

これらの素晴らしい経験や発見・自覚は、事業団が単なる「下請」ではなく、病院との関係を「提携」と考え、一緒になって本当に「よい仕事」をし、「よい病院」をつくっていきこうと努力してきたからこそ生まれたものだと思う。そしてこの「よい仕事」は、自分だけが安全ならいいというのではなく、全国の労働者や国民全体の安全のために、自らがどのような典型をつくるのか、という「全国観点」に立つ「変革の立場」によって生みだされたものでもある。

事業団全国連合会はB型肝炎の予防接種についても、急を要することである、との認識に立って、自らも必要な措置を講じつつ、病院関係の全労働者に対する病院や国の責任ある対応を求めている。

それ故にこの運動は病院やビルメン業界全体を動かし、ビルメンの下請労働者を広く組織化するものとなり、「清掃労働」の社会的な位置を高め、最低賃金ギリギリの賃金しかだせない請負単価を引き上げることや、「モップを洗う流しと同じところで湯飲み茶わんを洗っている」などという労働環境を改善することにも、必ずやつながっていくであろう。そうしていくことが、「捨てるゴミの向こう」を連載した私の念願でもある。

各界が注目。初のアンケート調査

職場長が記入してください

④対策をとっていたら、その内容は

其美曰：太甚！一夫之

＜カンパニイ＞ 建築家事務所

②感染の危険が大きい患者の入退院や病室番号について病院から情報が提供されていますか。へい、いい、いる。V

へない、
ある()
週一回()
同くらい

⑪ 日型肝炎の予防接種をうけたことがある。

① 予防推進をしてほしいですか
 へしてはくはない (L) はいい

② その費用は三万円かかりますが、だれが
 よんだんですべきだと考えますが
 ・国や自治体が全額、病院が全額、事業
 団が全額、本人が全額、国と自治体の補
 助のもとに病院が、国と自治体の補助
 のもとに事業団が、事業団の補助で本人、
 ③ つぎの作業中、手袋をして、ますか
 ・トイレ清掃へしてないですか
 ・ゴミ出しへしてない (L) はいい
 ・モップしはりへしてない (L) している

④ こうしたら少しでも事故が、とれと思
 うこと (口元をほころばす) だとき、労働団
 体へ、病院に伝えたい (L) はいい

感染患者の入院中
等日前の通報
に

⑭厚生省が来年度におこなう病院廃棄物処理の実態調査について、注文したいこと

⑰注射針以外のことでは危険に感じること

夏冬の洗濯

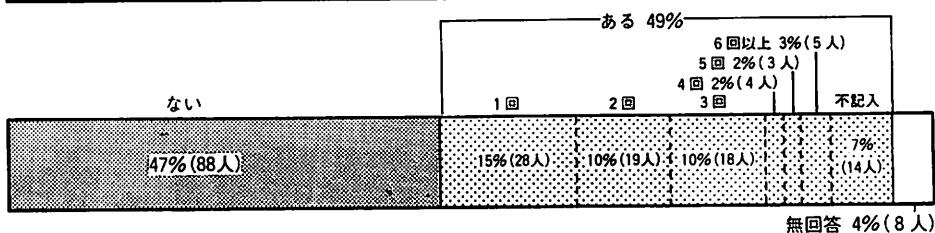
中。金。在。危。

合 濟 丁

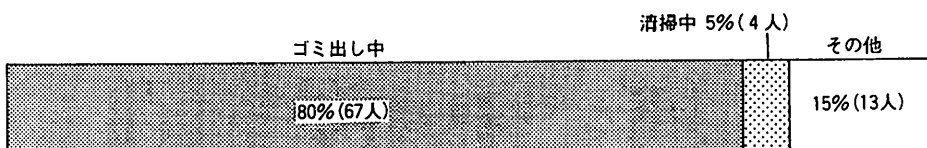
作。底。

刺した事故は「ゴミ出し中」が80%にも

この一年間に注射針を刺したことは



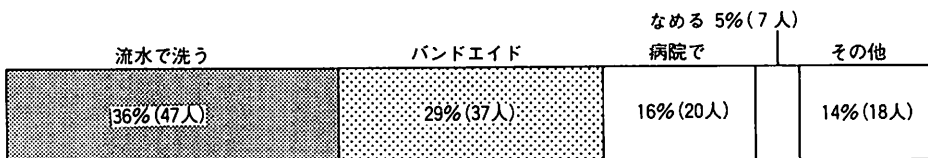
刺したのはどういう作業のときですか



☆「無回答」は省いて計算

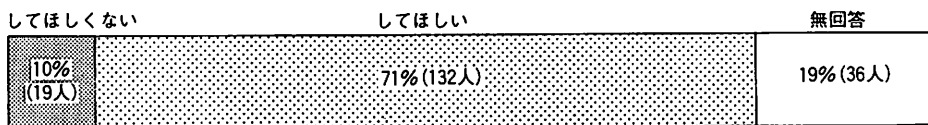
刺したときどのように処置していますか

(複数回答)



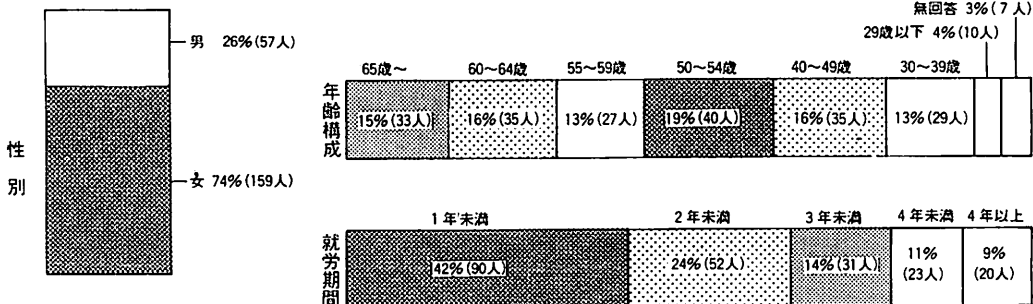
☆「無回答」は省いて計算

B型肝炎の予防接種をしてほしいですか



就労4ヵ月以上で、清掃を主とする187人の集計

就労期間に関係なく清掃を主とする団員216人の集計



この一年間に床などに落ちていた注射針を拾ったことがありますか

拾ったことがある 84%	拾ったことがある 84%							無回答
	ない	1～2本	3～4本	5～6本	7～10本	数十本	無数	
	10% (19人)	14% (27人)	9% (16人)	13% (25人)	6% (12人)	19% (35人)	11% (20人)	11% (21人)
								6% (12人)

それはどこで拾いましたか

(複数回答)

洗濯物の中 2% (6人)					
病室	廊下	ナースステーション	処置室	検査室	その他
29% (112人)	19% (75人)	18% (70人)	16% (63人)	11% (42人)	11% (42人)

☆「病室」には「ベッド」「患者用ゴミ入れ」も
☆その他は、「診察室」「汚物入れ」「看護婦更衣室」「手術室」
「ICU」「レントゲン室」など。

この一年間に注射針が一般のゴミの中に混入しているのを見つけたことは

拾ったことがある 84%	拾ったことがある 84%							無回答
	ない	1回	2回	3回	4回	5回	6～10回	
	27% (50人)	8% (15人)	6% (12人)	4% (8人)	2% (4人)	8% (15人)	4% (7人)	11% (20人)
							11回以上 3% (6人)	
								27% (50人)

「注射針による事故を防ぐためのアンケート」は、「じぎょうだん」新聞（10月15日付）の紙上アンケートとして行なった。

回答は11月8日現在、40事業所、223人から寄せられた。これは事業団員の常駐する病院現場42事業所の95%にあたり、関心の高さを物語っている。

清掃にたずさわる就労者の構成は、男26%に対し女74%。年齢は60歳以上が3分の1をしめ、最高齢者は77歳。

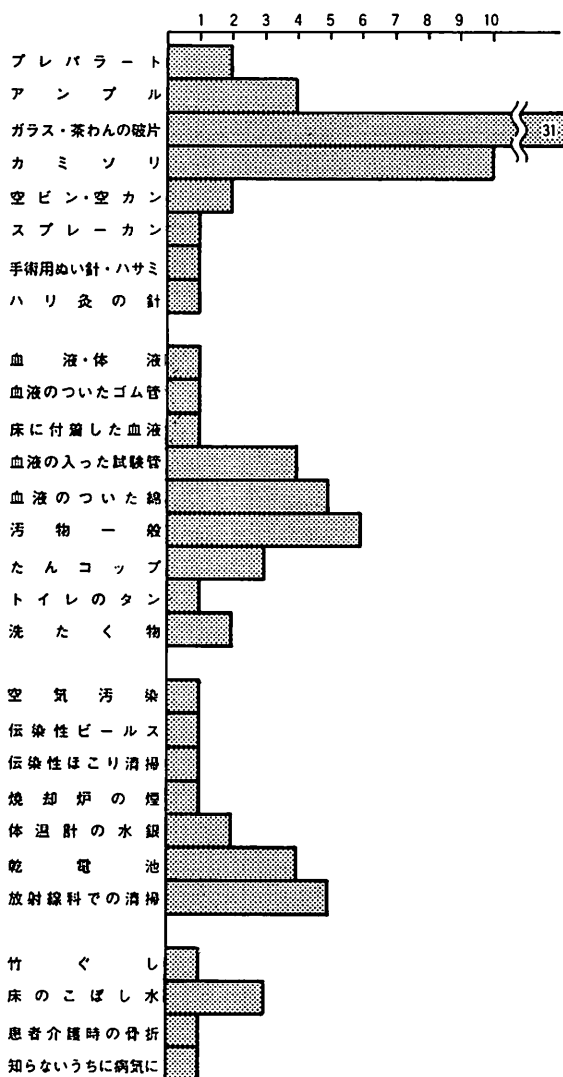
就労期間は42%が1年未満であり、2年未満が3分の2をしめていた。

このうち、就労4ヵ月未満の人と主な業務が清掃以外の人については集計からはずし、187人を基礎数とした。

回答の特徴を一言でいえば、「異常事態」としかいいようがない。「この1年間に針を刺した」人は49%にのぼり、「針を拾ったことがない」という人は10%にすぎない。

これは、これまで病院清掃労働者の安全問

注射針以外で危険に感じること



改善が求められるA病院

注射針の処理方法	カンや箱に入れる
患者についての情報提供	ない
事業団が請けてから	6年
回答団員数	4人
平均勤続年数	5年半
針を拾ったこと	毎日1本2人 毎週1本2人
どこで	病院、処置室、廊下、診察室、シート
一般のゴミへの混入の発見	ない3人 ある1人1回
一年間に針を刺したこと	ない 0人 ある 4人平均10回
病院で働き始めてから通算すると	ない 0人 ある 4人平均20回
刺したとき病院で感染の危険を 確認してもらうか	してもらわない

(注)この病院でも、最近、事業団と病院側との懇談会が開かれ、改善がすすんできたが、新しい看護婦さん、アルバイトの人などへの教育が徹底していないようだ

題が何ら顧みられなかったこと、注射針の処理方法に大きな欠陥のあること、などによるものと考えられる。

逆にこの問題を真剣に検討し、改善策を講じるなら、かなり改善しうることも、いくつかの事業所の例で示されていた。

とくに、「針を刺した」のは「ゴミ出し中」が圧倒的であり、この作業の見直しとともに、分別処理の徹底によって、かなりの事故が防げることも示された。だから、病院側

への要望も、「分別処理の徹底」「針を落とさぬように」「職員への教育を」という、ごく当たり前のことがほとんどであった。

また、「清掃の仕事についても知ってほしい」「感染患者の入院情報を」など、おたがいの仕事の状態を知り、必要な情報を知りあえるように、という点も、団員は強く求めている。

これらの要求は、「同じ病院で働く者どうしがもっと協力し、力をあわせて、安全で、

改善が進んでいるB病院

注射針の処理方法	ビンに密封
患者についての情報提供	ときどきある
事業団が請けてから	5年
回答団員数	4人
平均勤続年数	3年4ヵ月
針を拾ったこと	ない 2人
	ある 2人平均2本
どこで	病室、廊下
一般のゴミへの混入の発見	ない 1人
	ある 3人平均1回
一年間に針を刺したこと	
	ない 4人
	ある 0人
病院で働き始めてから通算すると	
	ない 2人
	ある 2人平均1.5回
刺したとき病院で感染の	
危険を確認してもらうか	してもらう

〈注〉この病院では、新築中の病院の清掃
控室をどのようなものにするかにつ
いても、団員の要望をくわしく聞い
てもらっている

よい病院をつくろうではないか」ということ
にほかならない。

これはまさに、労働者が「下請」という立
場をこえて、労働の主人公になっていく過程
でもあるだろう。

この結果をもとに、具体的な改善策につい
て、各病院で話しあいが始まっている。

このとりくみは、日本の病院全体にも影響
を与えるものとなるだろう。

少しでも事故を減らすために 病院側に考えてほしいこと

分別処理の徹底、点滴針も確実に	12
新入職員、交替職員、救急職員への教育	7
職員は自覚を、同じ人間だ	6
針を落とさぬよう。病室から持ち返りを	6
病院側は姿勢を正すべき	5
感染患者の入院情報の連絡を	4
何が危険なのかわからない。情報を	2
重いものを一つの袋につめこまないで	2
清掃の仕事についても知ってほしい	2
刺した場合の対処法、予防注射の制度化	1
針にはキャップをしてほしい	1
入院患者にゴミ出しの指導をしてほしい	1
院内感染予防の学習会をしてほしい	1
看護婦さんは忙しすぎる、人員増を	1
作業中、看護婦さんは場所をあけてほしい	1
危険な仕事をさせるだけの賃金を	1
(予防接種の要求は、はずしました)	

厚生省が行う実態調査への注文

清掃労働者も医療従事者として見よ	8
厚生省は自ら廃棄物処理場をつくれ	5
放射性廃棄物もふくめて、すべてのゴミを調査	4
し、危険性を明らかにせよ	
ぬきうちで現地調査を	3
針の処理方法、分別処理の徹底を指導せよ	2
処理場に持っていくまでの過程も調査を	1
開業医の調査も	1
自治体のゴミ収集回数(週に)も調べよ	1
汚物処理室、臨床検査室など立ち入ってじっく	1
りやるべきだ	
来年のいつ調査するのか、遅すぎる	1
国民の意見をもっと聞くべきだ	1